

# 河伯令嬢

泉鏡花

青空文庫





——心中見た見た、並木の下で  
しかも皓<sup>しらは</sup>齒と前髪で——

北国金沢は、元禄に北枝ほくし、牧童などがあつて、俳諧に縁が浅くない。——つい近頃み覽たのが、文政三年の春。……春とは云つても、あのあたりは冬ふゆ籠こもりの雪の中で、可心——という俳人が手づくろいに古屏風ふるびようぶの張替をしようとして——（北枝編——卯辰集）——が、屏風の下張りに残つていたのを発見して、……およそ百歳ももとせの古をなつかしむままに、と序して、丁寧に書きとつた写本がある。

卯辰は、いまも山よりの町の名で、北枝が住んでいた処らしい。

可心の写本によると、奥の細道に、そんな記事は見えないが、

翁おきなにぞ蚊帳つり草を習ひける

北枝

野田山のふもとを翁にともないで、と前がきしたのが見える。北方の逸士は、芭蕉を案内して、その金沢の郊外を歩行あるいたのである。また……

丸岡にて翁にわかれ侍りはべし時扇たまに書いて給はる。

もの書いて扇子おうぎへぎ分くる別わかれ哉かな

芭蕉

本人が「給わる」とその集に記したのだから間違いはあるまい。奥の細道では、

もの書かて扇子ひき引さくなごり哉

である。引裂くなどという景気は旅費の懐都合もあり、元来、翁の本領ではないらしい……  
…それから、

石山の石より白し秋の霜

芭蕉

那なた谷でら寺でらにおけるこの句が、

石山の石より白し秋の風

となつている。そうして、同じ那谷に同行した山中温泉の少年くめのすけ衆のすけ之助、あらた新あらたに弟子になつて、とうよう桃妖とうようと称したのに対しての吟らしい。

湯のわかれ今宵は肌の寒からむ

芭蕉

おなじく桃妖に与えたものである。芭蕉さん……性的に少し怪しい。……

山中や菊は手折らじ湯の匂ひ

この句は、芭蕉がしたためたのを見た、と北枝が記しているから、

山中や菊は手折らぬ湯の匂ひ

世に知られたのは、後に推すい敲こう訂正したものであろう、あるいはざる猿みる蓑みのを編む頃か。

その猿蓑に、

たこ 凧しらねきれて白嶺たけケ嶽を行方かな

桃妖

温泉の美少年の句は——北枝の集だと、

糸切れて凧は白嶺を行方かな

になつてゐる。そのいづれか是なるを知らない。が、白山を白嶺と云う……白嶺ケ嶽と云わないのは事実である。

これは、ただ、その地方に、由来、俳諧の道にたずさわつたものの少くない事を言いたいの過ぎない。……ところが、思いがけず、前記の可心が、この編に顔を出す事になつた。

私は——小山夏吉さん。(以下、「さん」を失礼する。俳人ではない。人となりは後に言おうと思う。)と炬燵こたつに一酌して相對した。

「——昨年、能登のとの外浦を、奥へ入ろうと歩行あるきました時、まだほんの入口ですが、羽昨はぐい郡の大笹の宿で、——可心という金沢の俳人の(能登路の記)というのを偶然読みました。寝床の枕まくらもと頭、袋戸棚にあつたのです。色紙短冊などもあるからちと見るように、と

宿の亭主が云つたものですから——」

小山夏吉が話したのである。

「……宿へ着いたのは、まだ日のたかい中うちだったので。下座敷の十畳、次に六畳の離れづくりで、広い縁は、滑るくらい拭ふきこ込んでありました。庭前にわさきには、枝ぶりのいい、大な松の樹が一本、で、ちつとも、もの欲しように拵こしらえた処がありません。飛々に石を置いた向うは、四ツ目に組んだ竹垣で、垣に青薄あおすすきが生添はえそって、葉の間から蚕豆そらめの花が客を珍らしのぞそうに覗く。……ずつと一面の耕地水田で、その遠くにも、近くにも、取りまわした山々の末すそかけて、海と思うあたりまで、一ひとつずつ蛙が鳴きますばかり、時々この二階から吹くように、峰をおろす風が、庭前にわさきの松の梢こすえに、颯さつと鳴って渡るのです。

——今でも覚えていますが、日の暮にも夜分にも、ほとんど人声が聞こえません。足音一つ響かないくらい、それは静しずかなものでした。それで、これが温泉宿……いや鉱泉宿です。一ひとしきり時世の中がラジウムばかりだった頃、憑つき憑つきものがしたように賑にぎわったのだそうですが、汽車に遠い山入りの辺鄙へんびで、特に和倉の有名ながある国です。近ごろでは、まあ精々在方の人たちの遊び場所、しかも田植時にかかって、がらんとしていると聞いて、かえって望む処と、わぎと外浜の海づたいから、二里ばかりも山へ入込んで泊つたのです。別に目



立つた景色もありません、一筋道の里で、川が、米町川が、村の中を、すぐ宿の前を流れますが、谿河ながら玉を切るの、水晶を刻むのと、黒い石、青い巖を削り添えて形容するような流ではありません。長さ五間ばかり、こう透すと、渡る裏へ橋げたまで草の生乱れた土橋から、宿の玄関へ立つたのでしたつけ。——（さあ、どうぞ。）が、小手さきの早業で、例のスリツパを、ちよいと突直すんじゃない、うちの女房が、襷をはずしながら、土間にある下駄を穿いて、こちらへ——と前庭を一まわり、地境に茱萸の樹の赤くぼつぼつ色づいた下を。それでも小砂利を敷いた壺の広い中に、縞笹がきれいらしく、すいすいと藺が伸びて、その真青な蔭に、昼見る蛍の朱の映るのは紅羅の花の蕾です。本屋続きの濡縁に添って、小さな杜若の咲いた姿が、白く光る雲の下に、明く、しつとりと露を切る。……木戸の釘は錆びついて、抜くと、蝶番が、がったり外れる。一つ撓直して、扉を開けるのですから、出会がしらに、水鶏でもお辞儀をしそうな、この奥庭に、松風で。……ですから、私は嬉しくなつて、どこを見物しないでも、翌日も一日、ゆつくり逗留の事と思つたのです。

それに、とにかく、大笹鉢泉と看板を上げただけに、湯は透通ります。西の縁づたいに、竹に石燈籠をあしらつた、本屋の土蔵の裏を、ずつと段を下りて行くのですが、人

懐こい可愛い雀が、ばらばら飛んだり踊ったり、横に人の顔を見たり、その影が、湯の中まで、竹の葉と一所に映るのでした。

——夜、寢床に入りますまで、二階屋の上うえした下、客は私一人、あまり閑静しずか過ぎて寝られませんから、枕頭へ手を伸ばして……亭主の云った、袋戸棚を。で、さぞ埃ほこりだらうと思うのが、きちんとしている。上うわつつみ包して一束、色紙、短冊。……俳句、歌よりも、一体、何と言いますか、冠かむりづけ、沓くつづけ、狂歌のようなものが多い、その中なかに——（能登路の記）  
——があつたのです。大分古びがついていた。仮綴かりとじの表紙を開けると、題に並べて、

（大笹村、川裳かわすそ明みょう神縁起しん。）としてあります。

川裳明神……

わたしはハツと思いました。」

二

「——川裳明神縁起。——この紀行中では、人が呼んで、御坊々々と言いますし、可心は坊さんかと、読みながら思いましたが、そうではない。いかにも、気がつくとその頃の俳

諧しゆぎの修行者しやうじやうは、年紀としにかかわらず頭を丸めていたのです——道理こそ、可心が、大木の松の幽寂ゆうじやくに二本、すつくり立つた処で、岐路わかれみちの左右に迷って、人ひと少な一軒屋で、孫を抱いた六十余あまりの婆さんに途みちを聞くと、いきなり奥へ入って、一錢いちもんもつて出た……  
 (いやとよ、老女)と、最明寺で書いていますが、報謝に預るのではない、ただ路を聞くのだ、と云うと、魂消たまげた気の毒な顔をして、くどくど詫わびをいいながら、そのまま、跣足はだしで、雨の中を、びたびた、二町ばかりも道案内をしてくれた。この老女の志、(現世に利益、未来に冥福めいふくあれ、)と手にした数珠を揉もんで、別れて帰るその後影を拝んだという……  
 宗匠あんぎやと、行脚ぎやうの坊さんと、容子ようすがそつくりだった事も分りますし、跣足はだしで路ぢしるべをしたお婆さんの志、その後姿うしろつきも、尊いほどに偲しのばれます。——折からのざんざ降ふりで、一人旅の山道に、雨宿りをする蔭かげもない。……ただ松の下で、行李こつりを解いて、雨合羽あまがっぱを引ひ絡きううちも、袖そでを絞しぼったというのですが。——これは、可心法師が、末森の古戦場——今浜から、所口(七尾)を目的めあてに、高畑をさして行く途中です。

何でもその頃は、芭蕉の流れを汲くむものが、奥の細道を辿たどるのは、エルサレムの宮殿、近代の学者たちの洋行で、奥州めぐりを済すまさない、一人前の宗匠とは言われない。加賀近国では、よし、それまでになくても、内外うちそと能登の浦うらづたいをしなないと、幅が利かな

かつたらしいのです。今からだと夢のようです。

はじめ、河北潟かほくがたを渡つて——可心は、あの湖を舟で渡つた。——高松で一夜宿、国境になりますな。それから末松の方へ、能登浦、第一歩の草鞋わらじを踏むと、すぐその浜に、北海へ灌ぐ川尻そそが三筋あつて、渡船がない。橋はもとよりで、土地のものは瀬に馴なれて、勘わたで渉わたるから埒らちが明く。勿論、深くはない、が底に夥おびただしく藻が茂つて、これに足を掬からまれて時々旅人が溺おぼれるので。——可心は馬を雇つて、びくびくもので渉わたつたが、その第三の川は、最も海に近いだけに、ゆるい流ながれも、押し寄せる荒海の波と相争つて、煽あおられ、揉もまるる水草は、たちまち、馬腹に怪しき雲の湧わくありさま。幾万条すじともなき、青い炎、黒い蛇が、旧暦五月、白い日の、川波かわなみに倒さかさまに映つて、鞍くらも人も呑のもうとする。笠被きた馬士まごが轡頭くつわをしつかと取つて、（やあ、黒よ、観音様念じるだ。しつかりよ。）と云うのを聞いて、雲を漕こぐ櫂かいかと危あやむ竹杖たけづえを宙に取つて、真俯まうつぶし伏ふしになつて、思わずお題目をとなえたと書いています。

旅行は、どうして、楽なものではなかつたのです。可心にとって、能登路のこの第一歩の危あぶな懼つかしさが、……——実は識しんをなす事になるんです。」

と言つて、小山夏吉は一息した。

「やがて道端の茶店へ休むと——薄曇りの雲を浴びて背戸の映山紅が真紅だった。つい一句を認めて、もの優しい茶屋の女房に差出すと、渋茶をくんで飲んでいる馬士が、俺がにも是非一枚。で、……その短冊をやたらに幾度も頂いた。（おかし。）と云つて、宗匠ちよつと得意ですよ。——道中がちと前後しました。——可心法師は、それから徒歩で、二本松で雨に悩み、途に迷い、情あるお婆さんに導かれて後、とぼとぼと高畑まで辿り着く。その夜、旅のお侍と俳談をする処があります。翌日は快晴。しかし昨日、道に迷った難儀に懲りて、宿から、すぐ馬を雇つて出ると、曳出した時は、五十四五の親仁が手綱を取つて、十二三の小僧が鞍傍についていた。寂しい道だし、一人でも連は難有いと喜んで、宿はずれの並木へ掛ると、奴が綱に代つて、親仁は啣煙管で、うしろ手を組んで、てくりてくりと澄まして帰る。……前後に人脚はまるでなし。……（これ、兄や、こなた馬は曳けるかの、大丈夫じゃろうかの。私は初旅じゃ。その上馬に乗るも今度がはじめてじゃ。それにの、耳はよう聞えずの。……頼んだぞ。）いかにも心細そうです。読んでいて段々分りましたが、筆談でないと通じないほどでもないが、余程耳が疎いらしい。……あるいはそんな事で、世捨人同様に、——俳諧はそのせめてもの心遣りだったのかも知れません。勿論、独身らしいのです。寸人豆馬と言いますが、豆ほどの小僧と、馬

に木茸きくらげの坊さん一人。これが秋の暮だと、一里塚で消えちまいます、五月の陽炎かげろうを乗つて行きます。

お婆さんが道祖神さえのかみの化身なら、この子供には、こんがら童子の憑移のりうつつたように、路も馬も涉取りはかど、正午頃ひるごろには早く所口へ着きました。可心は穴水の大庄屋、林水とか云う俳友たよを便つて行くので。……ここから七里、海上の渡わたしだそうです。

ここの茶店の女房も、（ものやさしく取りはやして）——このやさしくを女扁に、花やさし※。——という字があててある。……ちよつと今昔の感がありましよう。——（女ばかりか草さえ菜さえ能登やさしは優やさしや土までも——俗謡の趣はこれなんめり。）と調子が乗つて、はやり唄まで記した処は、御坊、ここで一杯きこしめしたかも知れない。……

亭主が、これも、まめまめしく、方々聞合もんめわせてくれたのだけれども、あいにく便船へきえきがなく、別仕立の渡船で、御坊一人十匁もんめならばと云う、その時の相場に、辟易へきえきして、一晚泊はる事にきめると、居心のいい大きな旅籠はたごを世話しました。（私の大笹おほいの宿という形があります。）その宿に、一人、越中の氷見ひみの若い男の、商用で逗留とまりゆう中、茶の湯の稽古けいこをしているのに、茶をもてなされたと記してあります。商用で逗留中、若い男が茶の湯の稽古——その頃の人氣が思われます。しかし、何だかうら寂しい。

翌日は、巳の時ばかりに、乗合六人、石動山のお札くぼりの山伏が交つて、二人船頭で、帆を立てました。石崎、和倉、奥の原、舟尾、田鶴浜、白浜を左に、能登島を正面に、このあたりの佳景いわむ方なし。で、海上左右十町には足りまいと思う、大蛇と称える処を過ぎると、今度は可恐しく広い海。……能登島の鼻と、長浦の間、今の三ヶ口の瀬戸でしよう。その大海へ出る頃から、（波やや高く、風加わり、忽ち霧しぶき立つと見れば、船頭たち、驚破白山より下すとて、巻落す帆の、軋む音骨を裂く。唯一人おわしたる、いずくの里の女性やらむ、髪高等に結いなして、姿も、いうにやさしきが、いと様子あしく打悩み、白芥子の一重の散らむず風情。……

むかし義経卿をはじめ、十三人の山伏の、鰐の口の安宅をのがれ、俱利伽羅の竜の背を越えて、四十八瀬に日を数えつつ、直江の津のぬしなき舟、朝の嵐に濛つて、佐渡の島にも留まらず、白山の嶽の風の激しさに、能登国珠洲ヶ岬へ吹はなされたまいし時、いま一度陸にうけて、ともかくもなさせ給えとて、北の方、紅の袴に、唐のかがみを取添えて、八大竜王に参らせらると、つたえ聞く、その面影も目のあたり。……とこの趣が書いてあります。

——佐渡にも留めず、吹放つた、それは外海。この紀事の七尾湾も一手の風に※を飛ば

す、靈山の威を思うとともに、いまも吹きしむ思がして、——大笹の夜の宿に、ゾツと寒くなりました。それだのに搔巻を刎ねて、写本を持ったなり、起直ったんです、私は……」

小山夏吉の眉に、陰が翳した。

「……紀行に、前申した、川裳明神縁起とあるのでしよう。可心の無事はもとよりですが、ここでこの船に別条が起つて、白芥子の花が散るのではないか。そのゆうなる姿を、明神に祭つたのではないだろうか、とはつとしました。私の聞き知つた、川裳明神は女神ですから。……ところで（船中には、一人坊主を忌むとて、出家一人のみ立交る時は、海神の祟ありと聞けば、彼の美女の心、いかばかりか、尚おその上に傷みなむ。坊主には候わず、出家には侍らじ。と、波風のまぎれに声高に申ししが、……船助かりし後にては、婦人の妍きにつけ、あだ心ありて言いけむように、色めかしくも聞えてあたり恥し。）と云うので、木の葉とばかり浮き沈む中で、聾同然の可心が、何慰めの言も聞き得ないで、かえつて人の気を安めようと、一人、魚のように口を開けて、張つて（坊主でない、坊主でない。）と喚いた様子が可哀に見えます。

穴水の俳友の住居は、千石の邸の構で、大分懇にもてなされた。かこい網の見物に（わ



れは坊主頭に顛はちまき巻まきして）と、大おおに氣競きおう処ところもあつて——（鰯いわし、鯖さば、鱒あじなどの幾千ともな  
く水底みずそこを網ひるがえに翻ひるがえるありさま、夕陽ゆうひに紫の波を翻ひるがえして、銀の大坩おおるつぼ炉いろに溶とけるに異ならず  
。）——人氣にんぎがよくて魚も沢山あまだつたんでしよう。磯端いそばたで、日ひくれ方かた、ちよつと釣つをす  
ると、はちめ（甘鯛あまうおの子）、阿羅魚あらかうお、鰈かれいが見る見るうちに、……などは羨うらやましい。

七日ばかり居たのです。

これまでは、内浦で、それから半島の真中まんなかを間道越まじえに横切つて、——輪島街道。あ  
の外浦を加賀へ帰ろうという段取になると、路みちが嶮けわしくつて馬うまが立たない。駕籠かごは……四本  
竹たけに板いたを渡したほどなのがあるにはある、けれども、田植時いりかで昇あり手てがない。……大庄屋  
の家の屈強くつがうな若いものが、荷物と案内を兼ねて、そこでおかしいのは、（遣りきれなくな  
つたら負おぼさりたまえ。）と云う俳友の深切ひっかえです。出発の朝、空模様が悪いのを見て、雨が  
降ふつたら途中から必ず引返ひっかえせ、と心づけています。道は余程難儀なんぎらしい……」  
小山夏吉こたつふしんは、炬燵蒲団こたつぶとんを指さで辿たどりつつ言いつた。

読者よ、小山夏吉は続けて言う。

「何、私の大笹どまりの旅行なぞ、七尾行の汽車で、羽咋はぐいで下りて、一の宮の気多けた神社に参詣さんけいを済ませましたから、外浦へ出たまでの事ですが、それだって、線路を半道離れますと、車も、馬も、もう思うようには行きません。あれを、柴垣しばがき、犢くるみだに谷、大島、と伝つて、高浜で泊るつもり of 処を、鉱泉があると聞いて、大笹へ入ったので。はじめから歩行あるくつもりではありませんが、景色のいい処ほど、道は難渋なんじゆです。

ついでに……その高浜から海岸を安部屋あべやへ行く間に、川があります。海へ灌そそぐ川尻の処は、私はまだ通らなかつたうちですが、大笹の宿の前を流れる米町川の末になります。現に寢床へさらさらと音がします。——その川尻を渡つて、安部屋から、百浦ももうちら、志加浦しがうら、赤住あかすみ……この赤住を……可心の紀行には赤垣あやまと誤あやつています——福浦、生神いきがみ、七海ななうみ。それから富来とぎ、増穂ますほ、剣地つるぎじ、藤浜、黒島——外浜を段々奥へ、次第に、巖いわは荒く、波はおどろになつて、平たいらは奇あざに、奇あざは峭けわしくなるのだそう。……可心はこの黒島へ出たのです、穴水から。間に梨なしの木坂の絶所を越えて門前村、総持寺（現今、別院）を通つて黒島へ、——それから今言いました外浜を逆たどに辿つて、——一の宮まいへ詣つて、もとの河北瀉を金沢へ帰ろうとしたのです。黒島へ一晩、富来へ二晩、大笹に近い、高浜へ一晩。……ただ、

その朝の暴風雨と、米町川の流の末が、可心のために、——女神の縁起になりました。

まだ、途中の、梨の木坂を越えるあたりから降出したらしいのですが、さすが引返すでもなかった。家数四五軒、佗しい山間の村で、弁当を使った時、雨を凌いで、簀の子の縁に立掛けた板戸に、（この家の裏で鳴いたり時鳥。……）と旅人の楽書があるのを見て、つい矢立を取って、（このあたり四方八方時鳥、可心。）鳴いているらしく思われます。やがて、総持寺に参詣して、（高塔の上やひと声時鳥、可心。）これはちよつとおまけらしい。雨の中に、門前の茶店へ休んで、土地の酒造の豪家に俳友があるのを訪ねようと、様子を聞けば大病だという。式台まで見舞うのもかえって人騒せ、主人に取次もしようなら、遠来の客、ただ一泊だけでも気あつかいをされようと、遠慮して、道案内を返し、一人、しよぼしよぼ、濡れて出て、黒島道へかかろうとする、横筋の小川の畝をつたって来て、横ざまに出会った男がある。……大きく、酒、とかいた番傘をさしている、紀行の中にあるのです——

一杯、頂きましょう。

もう一杯。……もう一杯。

息つぎを、というほどの、私の話振ではありませんけれど、私に取って、これから少々勢をかりませんと、でないとお話しにくい事がありますから。……」

## 四

「羽織は着たが、大番傘のその男、足駄穿の尻端折で、出会頭に、これはと、頬被を取った顔を見ると、したり、可心が金沢で見知越の、いま尋ねようとして、見合わせた酒造家の、これは兄ごで、見舞に行つた帰途だということです。この男の住居が黒島で、そこへその晩泊りますが、心あての俳友は大病、思いがけないその兄の内へともなわれる……何となく人間の離合集散に、不思議な隠約があるように思われて。——私は宿で、床の上で、しばらく俯向いて、庭の松風を聞いていました。——

可恐しい荒海らしい、削立つた巖が、すすすす見えて、沖は白波のただ打累る、日本海は暗いようです。黒島を立つて、剣地、増穂——富来の、これも俳友の家に着いた。むかし、渤海の船が息をついた港だ、と言います。また格別の景色で。……近い処に増穂のあるのは、貝の名から出たのだそうで、浜の渚は美しい。……

金<sup>かない</sup>石<sup>いわ</sup>の浜では見られません。桜貝、阿古屋貝<sup>あこやがい</sup>、撫子貝<sup>なでしこがい</sup>、貝寄<sup>かいよせ</sup>の風が桃の花片<sup>はなびら</sup>とともに吹くなどという事は、竜宮を疑わないものにも、私ども夢のように思われたもので、可心も讚嘆しています。半日拾いくらした。これが重荷になった——故郷<sup>ふるさと</sup>へ土産に、と書いています。

このあたりに、荒城<sup>あらかき</sup>の狭屋<sup>さや</sup>と称<sup>とな</sup>えて、底の知れない断崖<sup>きりぎし</sup>の巖穴<sup>いわあな</sup>があると云つて、義経の事がまた出ました。

免<sup>のが</sup>れられない……因縁<sup>いんえん</sup>です。」

小山夏吉は、半ば独言<sup>つづや</sup>いて嘆息<sup>なげ</sup>して、苦<sup>にが</sup>そうに猪口<sup>ちよこ</sup>を乾<sup>ほ</sup>した手がふるえた。

小山夏吉は寂<sup>さびし</sup>く微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。

「ははは、泣くより笑<sup>わらい</sup>で。……富来<sup>とみき</sup>に、判官<sup>はんがん</sup>どのが詠<sup>よ</sup>じたと言<sup>い</sup>伝えて、（義経が身のさび刀<sup>や</sup>とぎに来て荒城<sup>あらかき</sup>のさやに入るぞおかしき。）北の方が、竜王の供料<sup>くねい</sup>にと、紅<sup>くれない</sup>の袴<sup>はかま</sup>を沈<sup>しず</sup>めた、白山がだけの風に、すずの岬<sup>さか</sup>へ漂<sup>ただよ</sup>った時、狭屋<sup>さや</sup>へ籠<sup>こも</sup>つての歌だ、というのです。悪い洒落<sup>しゃれ</sup>です。それに、弁慶<sup>あわび</sup>に鮑<sup>あわび</sup>を取<sup>と</sup>らせたから、鮑<sup>あわび</sup>は富来の名物<sup>めいぶつ</sup>だ、と言<sup>い</sup>います。多分七つ道具<sup>たがひ</sup>から思<sup>おも</sup>いついたものだろう、と可心<sup>かごころ</sup>もこれには弱<sup>よわ</sup>っている。……

富来を立つ時、荷かつぎを雇うと、すたすた、せかせか、女の癖に、途方もなく足が早い。おくれまいとすると、駆出すばかりで。浜には、榮螺さざえを起す男も見え、鰯いわしを拾う童わらわも居る。……汐しおの松の枝ぶり一つにも杖を留めようとする風流人には、此奴こいつあてつけに意地の悪いほど、とつとつと行く。そうでしょう、駄賃を稼ぐための職業婦人が聾つんぼの坊さんの杖つきの字に附合あつていられる筈はずはない。喘あえぎ喘あえぎ、遣切あれなくなつて、二里ばかりで、荷かつぎを断りました。御坊が自分で、荷を背負しよつて、これから註文通り景色を賞ほめ賞ほめ歩ある行き出したは可あいが、荷が重い。……弱つた、弱つた、とまた弱つている。……

福浦のあたりは、浜ひろがりに、石山の下を綺麗な水が流れて、女まじりに里人のどちが能登縮ぢみをさらして、その間あいあい々の竈くじからは、塩を焼く煙が靡なびく。小松原には、昼顔の花が一面に咲いて、渚なぎさの浪の千種ちぐさの貝ひるがえに翻ひるがえるのが、彩色した胡蝶ちようちようの群むかたがる風情。何とも言えない、と書いている下から、背負しよい重りのする荷は一歩ひとあしずつ重量めかたが掛かる、草臥くたびれはする、汗にはなる。荷かつぎに続いて息せいた時分から、もう咽喉のどの渴めかたきに堪えない。……どこか茶店をと思うのに、本街道は、元来、上の石山を切つて通るので、浜際は、もの好すきが歩ある行くのだから、仕事をしている、布さらし、塩焼に、一杯無心する便宜はありません。いくら俳諧師だといつて、昼顔の露は吸えず、切ない息を吐ついて、ぐったりした坊

さんが、辛うじて……赤住まで来ると、村は山際にあるのですが、藁葺わらぶきの小家こやが一つ。  
 伏屋貝ふせやがいかと浜道へこぼれていて、朽ちて崩れた外流そとながしに——見ると、杜若かきつばたの真の  
 瑠璃色るりいろが、濡色に咲いて二三輪。……

可心は、そこを書くための用意だかどうだか、それまでの記事のうちに、一ヶ処も杜若  
 を記していません。

——その癖、ほんの片浦を見ました。私の目にも。——

小山夏吉は、炬燵こたつに居直つて言うのである。

「湖、沼、池の多い土地ですから、菖蒲杜若あやめかきつばたが到る処に咲いています。——今この襖ふすま  
 へでも、障子へでも、二三条ばかり水の形を曳ひいて、紫の花をあしらえば、何村、どの里  
 ……それで様子がよく分るほどに思うのです。——大笹の宿しゆくへ入つても、中庭の縁に添つ  
 て咲いていたと申しましたつけ。

——杜若の花を小棲こづまに、欠盥かけだらひで洗濯をしている、束ね髪で、窠々やつやつしいが、（その  
 姿のゆうにやさしく、色の清げに美しさは、古井戸を且つ蔽おほいし卵うの花の雪をも欺あざむきぬ。  
 ……類たぐひなき艶えん色しよく、前の日七尾の海の渡船にて見参みさんらせし女にょしやう性せいにも勝りて）……と

云つて……（さるにても、この若き女房、心頑かたくなに、情冷なさめたく、言わむ方なき邪慳じやけんにて、）とのつけに遣ツつけたから、読んでいて吃驚びつくりすると、（茶を一つ給われかし、御無心）と頼んだのに、

（茶屋はあちらに。）——

と云つて断つたのです。耳が聞えないんですから、その女は前途ゆくてへ指さしでもしたらしい。……（いや、われらは城下のものにて、今度このたび、浦々を見物いたし、またこれよりは滝谷たきだにの妙成寺みょうせいじへ、参詣をいたすもの、見受け申せば、我等と同じ日蓮宗の御様子なり。戸かどのお札をさえ見掛けての御難題、坊主に茶一つ恵み給うも功德なるべし、わけて、この通り耳うじも疎うとし、独旅ひとりたびの辿たど々たどしさもあわれまれよ。）と瘦法師やせほうしが杖すがに縋すがつて、珠数しゆずまで揉もみながら、ずつと寄ると——ついと退のく。……端折はしよつた白脛しろはぎを、卯の花に、はらと消し、真白まっしろい手を、衝つと掉ふつて押退おしけるようにしたのです。芋を石にする似非えせ大師だし、むか腹を立つて、洗濯物の黒くなれと、真黒まっくろに呪詛のろつて出た！……

（ああ、われこそは心頑かたくなに、情なく邪慳無道であつたずれ。耳うときもの人十倍、心のひがむを、疾やまいなりとて、神にも人にも許さるべしや。）と追おっつけ、慚愧後悔ざんきをするのです。能登では、産婦のまだ七十五日を過ぎないものを、（あの姉さんは、まだ小屋うちの中、）



と言う習慣ならわしのあるくらい、黒島の赤神しやくじんは赤神様あかがみさまと申して荒神あらがみで、厳きびしく不浄きじやうを嫌きらむる。社やしろまわりでは産小屋うぶごやを別に立てて、引籠ひきこもる。それまでではなくても、浦浜うらはま一体にその荒神あらかみを恐おそれました。また靈験れいげんのあらたかさ。可心こころは、黒島でうけた御符おふだを、道中安全みちちゆうぜんぜんと頭陀袋ずだごくろにさしていた。

とんでもない。……女が洗せんっていたのは、色のついた、うつ木の雪の一枚まいだったと言うのです。

振返かきつつて、一ひと一ひと睨にらみ。杜かきつ若つばたの色も、青い虫ほどに小さくなつた、小高い道に、小川ひとすじが一条流れる。板の橋が掛かかつた石段の上に、廻まわり縁えんのきれいなのが高く見えた。――  
 橋の上に、兄弟あならしい男の子が、二人遊あそんでいたもので、もしやと心頼こころたのみに、茶を一つ、そのよし頼たのむと、すぐに石段を駈かけ上あがり縁えんを廻まわつたと思おもえば、十歳とおばかりの兄の方が、早く薄うすべりを縁えんに敷敷いた。そこへ杖つゑを飛ばしたそうです。七十ななぐらゐの柔和わやうなお婆おばさんが煙たばこ草盆ぼんを出だしてくれて、すぐに煎茶せんちやを振舞まわい、しかも、嫁よめが朝あさの間拵まじらえたと、小豆餡あずきあんの草団子くさだんごを馳走ちそうした。その風味ふうみのよさ、嫁よめごというのも、容色きりようも心も奥ゆかしい、と戴たいいています。が、この嬉うれしさにつけても思おもう、前刻まじの女おんなの邪慳じゃけんさは、さすがに、離わかれた土地ちではないから、可心こころも何にも言いわなかつた。その事が後のちに分わかります。……この一ひとかま

構えは、村の庄屋で。……端近へは姿も見えぬ、奥深い床の間と、あの砂浜の井戸端と、花は別れて咲きました。が、いずれ菖蒲あやめ、杜若かきつばた。……二人は邑知瀉おうちがたの汀みぎわに、二本のうつくしい姉妹きょうだいであつたんです。

長話はしたが、何にも知らずに……可心は再び杖を曳ひいて、それから二三町坂を上ると、成程、ちよつとした茶店もあつた。……泊とまりを急いで、……高浜しゆくの宿へ着きました。

可心はまだ川を渡らない。川を渡る、そこが……すぐ大笹の宿の前を流れて米町川の海そそに灌ぐ処そそなんです。百年前の可心は、いまその紀行で、——鉢泉宿の真夜中の松を渡る風にさえ、さらさらと私の寢床に近づきました。」

小山夏吉は杯を取つた。

「高浜では、可心に相宿がありました。……七歳ななつばかりの男の子を連れた、五十近い親仁おやじで、加賀の金石の港から、その日漁船の便で、海上十六七里——当所まで。これさえ可なり冒険で。これからは浪が荒いから、外浜を徒歩かちで輪島ゆへ行く。この子の姉を尋ねて、と云う。——日曜に、洋服を着た子の手をひいたのでないと、父親の、子をつれた旅は、いずれ遊山ではありません。何となく、貧乏わびくさい佻わびしいものです。私なども覚おぼえがあります。親仁は問わずがたりに、姉娘は、輪島で遊女のつとめをする事。この高浜は、盆前から夏

一杯、入船出船で繁昌はんじやうし、一浦ひとつうらが富貴ふつきする。……その頃には、七尾ななしから山越やまこしで。輪島からは海の上を、追立てられ、漕流こぎながされて、出稼いでせぎの売色つとめに出る事。中にも船で漂うのは、あわれに悲かなしく、浅ましい……身からだの丈夫ぢゆうぶで売盛うれさかるものにはない、弱い女が流される。(姉あねめも、病身いねむじやによつて、)と蜘蛛くもの巣すだらけの煤すすけ行燈あんどんにしよんぼりして、突伏つつぶして居い睡ねむる小児こどもの蚊こもを追おいながら、打語うる。……と御坊いねむは縁起えんぎで云うのですが。

——場所と言いい、境遇きんぐうと言いい、それがそのまま、私の、恋の、お優やささんの——」

小山夏吉は肩を落して、両手を炬燵こたつにさし入れた。

「電燈でんとうが暗くなつたようです。……目のせいせいか知れません。何なにですか、小さな紫むらさが、電燈でんとうのまわりをちらちらします。

大雨大風になりました。

可心こころが、翌日あした、朝あがけに志こころす、滝谷たきやの妙成寺めうじやうじは、そこからわずか二里にり足たりらずですが、間道まぢにかかるという。例れいの荷にはあり、宵よの間に荷にかつぎを頼たのんで置いたが、この暴風雨あらしでは出立い出来でようかと、寝ねられない夢ゆめに悩なやんだ。風かぜは、いよいよ強つよい、しかし雨あめは小降こふりになつ

て、朝飯の時、もう人足が来て待つていと、宿で言うので。

杖と並んで、草鞋わらしを穿く時、さきへ宿のものの運んだ桐油包とうゆづつみの荷を、早く背負しょつて、髪を引きしめた手拭てぬぐいを取つて、颯さつと臉まぶたを染めて、すぐむかと思うほど、内端うちわにおじぎをした婦おんなを見ると、継はぎの足袋に草鞋ばかり、白々とした脛はぎばかり、袖かきつばたに杜かきつばた若の影もささず、着流した蓑みのに卯の花の雪はこぼれないが、見紛みまがうものですか。引東ねた黒髪には、雨のまま水も垂りそうな……昨日きのうの邪慳じゃけんな女です。

御坊は、たちまち、むつとして——突立つったつて、すたすた出ました。

ここが情なさけない。聾つんぼの僻ひがみで、昨日悩まされた、はじめの足疾あしばやな女に對するむか腹立も、かれこれ一斉いっせきに打撞ぶつかつて、何を……天氣は悪し、名所の見どころもないのだから、とつとつ、すたすた、つんつん聾が先へ立つて。合羽かっぱを吹きなぐりに、大跨おおまたに踏出ふみだした。

——ああ、坊さんの仏頂面が、こつちを向いて歩行あるいて来ます。「

小山夏吉は串戲しやうだんらしいが、深く、眉ひそを蹙ひそめたのである。

「従つて、対手あいてを不機嫌にした、自分を知つて、偶然にその人に雇われて賃錢を取る辛さは、蓑もあら蓑の、毛が針となつて肉を刺す。……撫肩なでがたに重荷に背負なつて加賀笠を片手に、うなだれて行く細り白い頸脚えりあしも、歴然ありあり目に見えて、可傷いた々々しい。

声を掛けて、呼掛けて、しかも聾に、大な声で、婦の口から言訳の出来る事らしくは思われぬ。……吹降ですから、御坊の頭陀袋に、今朝は、赤神の形像の顯れていなかつた事は、無論です。

家並を二町ほど離れて来ると、前に十一二間幅の川が、一天地押包んだ巖山の懐から海へ灌いでいる。……

(翌日、私が川裳明神へ詣ろうとして、大笹の宿の土橋を渡ろうと、渡りかけて、足がすぐみました。そこは、おなじ米町川の上流なんです。——)

その海へ落口が、どつと濁つて、流が留まつた。一方、海からは荒浪がどんどんと打つつける。ちようどその相激する処に、砂山の白いのが築洲のようになつて、向う岸へ架つたのです。白砂だから濡れても白い。……鵜の橋とも、白瑪瑙の欄干とも、風の凄じく、真水と潮の戦う中に、夢見たような、——これは可恐い誘惑でした。

暴風雨のために、一夜に出来た砂堤なんです。お断りするまでもありませんが、打つて寄せる浪の力で砂を築き上げる、川も増水の勢で、砂を流し流し、浪に堰かれて、相

逆からつてそこに砂を装もりあ上げる。能登には地勢上、これで出来た、大沼小沼が、海岸にはいくらもあります。——河北潟も同一おなじでしょう。がそれは千年！ 五百年、五十年、日月の築いた一種の橋立です。

いきなり渡つて堪たまるものですか。

つんぽ 聾むかっばらひがみの向腹立が、何おのれで、渡わたりをききも、尋ねもせず、足疾あしはやにずかずかと踏掛ふんがけて、二三間ひよこひよこ発奮はずんで伝わったと思うと、左の足が、ずぶずぶと砂に潜ひつた。あつと抜くと、右の方がざくりと潜る。わあともがきにく、檜木ひのきがき笠を、高浪が横なぐりに撲りつけて、ヒイと引く息に潮を浴びせた。

杖いたずらは徒いたずらに空に震えて、細い塔婆が倒れそうです。白い手すくいがその杖にかかると、川の方へぐいと曳ひき、瘦法師やせほうしの手首を取った救すくいの情なさけに、足は抜けた。が、御坊ごぼうはもう腰を切つて、踏立ふみてない。……魔まの沼へ落込おちこむのに怯おびえたから、尻しりを餅もちについて、草鞋わらじをばちやばちやと、蠅はの脚で刎はねる所へ、浪なみが、浪なみが、どぶん——

「お助け。——」

波なみがどぶん。

目も口も鼻も一時にまた汐を嘗めた。

「お助け——」

濤がどぶーん。

「お助け——」

耳は聾だ。

「助けてくれ——」

川の方へ、引こう引こうとしていた、そのうつくしい女の、優しい眉が屹としまると、蓑を入れちがいに砂堤に乗って、海の方から御坊の背中を力一杯どんと圧した。ずるずるずると、可心は川の方へ摺落ちて、丘の途中で留まった。この分なら、川へ落ちたつて水を飲むまでで生命には別条はないのに。ああ、入替った、うつくしい人の雪なす足は、たちまち砂へ深く埋つたんです。……

吻と一息つく間もない、吹煽らるる北海の荒浪が、どーん、どーんと、ただ一処のごとく打上げる。……歌麿の絵の蟹でも、かくのごとくくんば溺れます。二打ち三打ち、顔るる潮の黒髪を洗うたびに、顔の色が、しだいに蒼白にあせて、いまかえつて雲を破つた朝日の光に、濡蓑は、颯と朱鷺色に薄く燃えながら——昨日坊さんを払つたように、

目口にそそ灌ぐ浪を払い払いする手が、乱れた乳のあたりに萎々なえなえとなると、ひとつ寝の枕に、つんと拗すねたように、砂の衾ふすまに肩をかえて、包みたそうに蓑の片袖を横顔に衝つと引いた姿な態で、羽衣の翼は折れたんです。

可心は、川の方の砂堤すなごての腹にへばりついて、美しい人の棄てた小笠を頭陀袋ずだぶくろの胸に敷き、おのが檜木笠を頸ほんのくぼ窪くぼにへし潰つぶして、手足を張り継すがったまま、ただあれあれ、あつと云う間だった、と言うのです。

——三年経たつて、顔色がんしよくは憔悴しょうすいし、形容は脱落した、今度はまったくの墨染の龔坊主が、金沢の町人たちに送られながら、新しい筵むしろの縦に長い、箱包を背負しよつて、高浜へ入つて来ました。……川口かわぐちに船を揃えて出迎えた人数の中には、穴水の大庄屋、林水。黒島の正右衛門。……病気が治つて、その弟の正之助。その他、俳友知縁こしぞが挙げたのです。可心法師の大願によつて、当時、北国の名工が丹精をぬきこんでた、それが明神の神像でした。美しい人の面影です。——

村へ、はじめて女神像じょしんぞうを据えたのは、あの草団子のまわり縁で。……その家の吉之助というのの女房、すなわち女神の妹は、勿論、姉あねが遭難の時、真さきまっきに跣足はだしで駈かけつけた



そうですが、

(あれ、あれ、お祝の口紅を。身からだがきれいになつて。)

と、云つて泣いたそうです。

姉が日雇に雇われるとは知らなかつた。……中たがいをしたのでも何でも無い。選んだ夫の貧しい境遇に、安処して、妹の嫁入さきから所帯の補助たすけは肯がえんじなかつた。あの時、――橋で中よく遊んでいた男おとこのこ子たち、かえつて、その弟の方が、姉あねさんの子だつたそうです。

この妹が、凜りんとしていた。土地の便宜上、米町川の上流、大笹に地を選んで、とにかく、在家を土蔵ぐるみ、白壁づくりりに、仮屋を合せて、女神像をそこへ祭つて、可心は一生堂守で身を終る覚悟であつた処。……

(お心はお察し申しますが、一つ棟にお住いの事は、姉がどう思うか、分りかねます。御あ僧なをお好き申して助けましたか。可いや厭で助けましたか。私には分りませんから。)

妹がきつぱり云つた。

可心は、ワツと声を上げて泣いたそうです。

そこで、可心一代は、ズツと川下へ庵いおりを結んで、そこから、朝夕、堂に通つて、かしず

いて果てた、と言います。

この庵のあとはありません。

時に不思議な縁で、その妹の子が、十七の年、川尻で——同じ場所です——釣をしていて、不意に波に浚さらわれました。泳およぎは出来たが、川水の落口で、激浪に揉もまれて、まさに溺おぼれようとした時、大な魚おおきに抱かれたと思つて、浅瀬はねだへ匆出されて助かった。その時、艶えんれ麗、竜女のごとき、おばさんの姿を幻まに視たために、大笹の可心寺へ駈かけこ込んで出家した。これが二代の堂守です。ところが、さいわい、なお子があつたのに、世を譲つて、あの妹も、おなじ寺へ籠つて、やがて世を捨てました。

川裳明神の像は、浪を開いた大魚に乗つた立像だそうです。

寺は日蓮宗です。ですが、女神の供物は精進ではない。その折まの蓑みのにちなんだのが、ばらみの、横みの、鬢びんみの、髻かもしの類、活毛いきげさえまじつて、女が備える、黒髪くろかみが取りつつんで、凄すこいようです。船、錨いかり、——纜ともづながそのまま竜の形になつたのなど、絵馬が掛かつていて、中にも多いのは、むかしの燈台、大ハイカラな燈明台のも交つています。

——これは、翌日、大笹の宿で、主人あるじを呼んで、それから聞いた事がある処は補おぎないましたし、……後のちとはいわず、私が見た事も交りました。」……

## 五

「……この女神めがみの信仰は、いつ頃か、北国に大分流布して、……越前の方はどうか知りませんが、加賀越中には、処々法華宗の寺に祭つてあります。いずれも端麗な女体です。

多くは、川裳かわすそを、すぐに獺かわうそにして、河の神だとも思つていて、——実は、私が、むしろその方だつたのです。——恐縮しなければなりません。

魔女だと言う。——実は私の魂のあり所だと思う、……加賀、金石街道かないわの並木にあり、ます叢祠ほこらすがたの像すがたなどは、この女神が、真夏の月夜に、近いあたりの瓜うりばたけ 畠はたけ——甜瓜まくわのです——露の畠へ、十七ばかりの綺麗な娘で涼みに出なすつた。それを、村のあぶれものの悪わる少る狡もの児の六人というのがやにわに瓜番の小屋へ担ぎあげて無礼をした、——三年と経たたず六人とも、ばたばたと死んだために、懺悔ざんげ滅罪めつざい拔苦功德はくくつとくのためとして、小さな石地藏が六体、……ちようど、義経の——北国落おちの時、足弱の卿の君おくが後れたのを、のびあがりのびあがりここで待つたという——（人待石）の土手下に……」

小山夏吉の顔は暗かった。

「海の方を斜ななめに向いて立っています。私はここで、生死しやうじの境の事を言わねばならぬありません。一杯下さい……」

炬燵こたつは巖いわのように見えた。

はじめよりして、判官殿ほんがんだんの北国の浦づたいの探訪のたびに、色の変るまでだった、夏吉の心が頷うなずかれた。

「——能登路の可心は、僻ひがみで心得違あやまいをしたにしろ、憎いと思った女の、過あやまって生命いのちを失ったのにさえ、半生を香華かうげの料に捧こたげました。……

（——これは縁起に話しましたが——）

私なんぞ、まったく、この身体からだを溝どぶいし石いしにして、這面しゃつらへ、一鑿ひとのみ、目鼻も口も、削りかけの地蔵にして、その六地藏の下座の端へ、もう一個ひとつ、真桑瓜を横嚙よこかじりにした処を、曝さらしものにされて可いいのです。——事実、また、瓜を食くって渴命かつめいをつないでいるのですから。」

と自棄やけに笑った。が、酔よもさめ行く、面おもての色とともに澄切すみった瞳まなこすずしく、深く思情おもいを沈めた裡うちに、高き哲人の風格がある。

ここは渠かれについて言うべき機会らしい。小山夏吉は工人にして、飾職かざりしよくの上手である。

金属の彫工、細工人。この業は、わぎ 絵画、彫刻のごとく、はしけやけき芸術ほど人に知られない。鑄金家、まきえし 蒔絵師などこそ、且つ世に聞こゆれ。しかも仕事の上では、美術家たちの知らぬはない、小山夏吉は、飾職の名家である。しかも、その細工になる瓜の製作は、ほとんど一種の奇蹟である。

自ら渠が嘲った。

「——瓜を食つて生きている——」

いま芸術を論ずる場合ではないのだから、渠の手腕についてはあえて話すまい。が、その作品のうちで、瓜——まくわうり 甜瓜が讚美される。露骨に言えば、しきりに註文され、よく売れる。思うままの地金を使って、おおき 実物の大き、め 姫瓜、そらま 烏瓜ぐらいなのから、小さなのは蚕豆なるまで、品には、こうろ 床の置もの、こうろう 香炉、こうろう 香合、てぼこ たぐい 釣香炉、手奩の類、むく 黄金の無垢で、かんざし きやく 簪の玉を彫んだのもある。地金は多くは銀だが、しづいち 青銅も、しやくとう 臙銀も、み 烏金も……まつく 眞黒な瓜も面白い。皆、まくわ 甜瓜を二つに割つて、しづいち 印籠づくりの立上り靈妙に、その実と、ふた 蓋とが、すつと風を吸つて、たがね ぴたりと合つて、ひとつ むくりと一個、ひらぞうがん 瓜が据る。肉取り、ししど 平象嵌、けぼり 毛彫、ちりば 浮彫、ちりば 筋彫、ちりば 石め、ちりば 鑿は自由だから、つる 蔓も、つる 葉も、あるいは花もこれに添う。玉の露も鏤む。

いずれも打出しもので、中はつぎのないくりぬきを、表の金質に好配して、黄金また銀の薄金を覆輪に取つて、しつくりと張るのだが、朱肉入、驕った印章入、宝玉の手奩にも、また巻煙草入にも、使う人の勝手で異議はない。灰皿にも用いよう。が希くば、竜涎、蘆薈、留奇の名香。緑玉、真珠、紅玉を装らせたい。某国——公使の、その一品を贈ものに使つてから、相伝えて、外国の註文が少くない。

ただ、ここに不思議な事がある。一度手に入れた顧客、また持ぬしが、人づてに、あるいは自分に、一度必ず品を返す。——返して、礼を厚うして、蓋と実のいずれか、瓜のうつろの処へ、ただもう一盪、何ものにてても、手が欲しいと言うのである。ほかの芸術における美術家の見識は知らない。小山夏吉は快くこれを諾して、情景品に適し、景に応じ、時々心のままに、水草、藻の花、薄の葉、桔梗の花。鈴虫松虫もちよつと留まろうし、ささ蟹も遊ばせる。あるいは単に署名する。客はいずれも大満足をするのである。

外国へ渡つたのは、仏蘭西からと、伊太利、それから白耳義と西班牙から、公私のおのその持ぬしから、おなじ事を求めて、一度ずつ瓜を返したのは、小山夏吉も舌をまいて一驚を吃したそうである。妙に白耳義が鼯鼠で、西班牙が好な男だから、瓜のうつろへ、一つには蛸を、頸の銅に色を凝らして、烏金の烏羽玉の羽を開き、黄金と青金で光の

影をぼかした。一つには、銀象嵌の吉丁虫を、と言っていた。

こう陳列すると、一並べ並べただけでも、工賃作料したたかにして、堂々たる玄関構の先生らしいが、そうでない。挙げたのは二十幾年かの間の折にふれた作なのである。第一、一家を構えていない。妻子も何も持たぬ。仕事は子がいから仕込まれた、——これは名だたる師匠の細工場に籠ってして、懐中のある間は諸国旅行ばかりして漂泊い歩行く。

一向に美術家でない。鋳屋、鋳職をもつて安んじているのだから、井に蝦蟇口を突込んで、印半纏で可きそうな処を、この男にして妙な事には、古背広にゲエトルをしめ、草鞋穿で、鑿、鉄鎚の幾挺か、安革鞆で斜にかけ、どうかするとヘルメット帽などを頂き、繻子の大洋傘をついて山野を渡る。土木の小官吏、山林見廻りの役人か、何省お傭の技師という風采で、お役人あつかいには苦笑するまでも、技師と間違えられると、先生、陰気にひそひそと嬉しがって、茶代を発奮む。曰く、技師と云える職は、端的に数字に齊しい。世をいつわらざるものだ、と信ずるからである、と云うのである。

(——夜話の唯今なども、玄関の方には件のヘルメットと、大洋傘があるかも知れない。)

が、甜瓜は——「瓜を食って活きている。」——渠の言とともに、唐草の炬燵の上に、

黄に熟したると、半ば青きと、葉とともに転がった。

## 六

小山夏吉は更めて言を継いだ。――

「あの、金石街道の、――（人待石）に、私は――その一日、昼と夜と、二度ぐったりとなつて、休みました。八月の半ば、暑さの絶頂で、畠には瓜が盛の時だったんです。年は十七です。

昼の時は、まだ私という少年も、その生命も日南で、暑さに苦しい中に、陽気も元気もありました。身の上の事について、金石に他家の部屋借をして、避暑かたがた勉強をしている、小学校から兄弟のように仲よくした年上の友だちに相談をして行つたんですから。あるいは希望が達しられるかも知れないと思つたので。

つまり、友だちが暑中休暇後に上京する――貧乏な大学生で――その旅費の幾分を割いて、一所に連れて出してもらいたかつたので。……

――父のなくなつた翌年、祖母と二人、その日の糧にも困んでいた折から。



何、ところが、大学生も、御多分に洩れず、窮迫していて、暑中休暇は、いい間の体裁。東京の下宿に居るより、故郷の海岸で自炊をした方が一夏だけでも幾千か蹴出せようという苦しがりで、とても相談の成立ちっこはありません。友だちは自炊をしている……だから、茄子を煮て晩飯を食わしてくれたんですが、いや、下地が黒い処へ、海水で色揚げをしたから、その色といったら茄子のようで、ですから、これだって身の皮を剥いでくれたほどの深切です。何しろ、ひどい空腹の処へ、素的に旨味そうだから、ふうふう蒸気の上る処を、ががつとして、加減なしに、突然頬張ると、アチチも何も無い、吐出せばまだ可いのに、渴えているので、ほとんど本能の勢、といった工合で、呑込むと、焼火箸を突込むように、咽喉を貫いて、ぐいぐいと胃壁を刺して下って行く。……打倒れました。息も吐けません。きりきりと腹が疼出して止りません。友だちが、笑いながら、心配して、冷飯を粥に煮てくれました。けれども、それも、もう通らない。……酷い目に逢いました。

横腹を抱えて、しょんぼりと家へ帰るのに、送って来た友だちと別れてから、町はずれで、卵塔場の破垣の竹を拾って、松並木を——少年でも、こうなると、杖に縋らないと歩行けません。きりきり激しく疼みます。松によっかかかったり、薄の根へ踞んだり……

：杖を力にして、その（人待石）の処へ来て、堪らなくなつて、どたりと腰を落しました。幹が横に、大きく枝を張つた、一里塚のような松の古木の下に、いい月夜でしたが、松葉ほどの色艶もない、藁すべ同然になつて休みました。ああ、そこいらに落散つてゐる馬の草鞋の方が、余程勢がよく見えます。

道を挟で、入口に清水の湧く、藤棚の架つた茶店があつて、（六地藏は、後に直ぐその傍に立つたのですが、）——低く草の蔭に硝子の簾が透いて、二つ三つ藍色の浪を描いた提灯が点れて、賑かなような、陰気なような、化けるような、時々高笑をする村の若衆の声もしていたのが、やがて、寂然として、月ばかり、田畑が薄く光つて来ました。

あとまだ一里余、この身体を引摺つて歸つた処で、井戸の水さえ近頃は濁つて悪臭し：七十を越えた祖母さんが、血を吸う蚊の中に蚊帳もなしに倒れて、と思うと、疼む腹から絞るようにひとりで涙が出て、人影もないから、しくしくと両手を顔にあてて泣いていました。

（どうなすつたの。）

花の咲くのに音はしません。……いつの間にか、つい耳許に、若い、やさしい声が聞

こえて、

(お腹なかが疼いたいんですか。)

少年こしもたち、病気を見舞うのに、別に、ほかに言葉はないので……こう云つてくれたのを、

夢か、と顔を上げて見ると、浅葱あさぎの切きで、結綿ゆいわたに結つた、すずしい、色の白い……私と

おなじ年とし紀しごろの、ああ、それも夢のような——この日、午後四時頃のまだ日盛ひざかりに——

往ゆきにここで休んだ時——一足おくれて、金沢の城下の方から、女たち七人ばかりを、頭づ

痛膏つうこうを貼はつた邪慳じゃけんらしい大年増と、でつくり肥ふとつた膏親爺あぶらおやじと、軽薄けいはくらしい若いも

のと、誰が見ても、人買が買出した様子なのが、この炎天だから、白鷺はくがも鴨かもも、豚も羊も、

一度水を打つて、活いきをよくし、ここの清水で、息を継がせて、更に港へ追立おつたてた……

……更に追つて行く。その時、金石の海から、河北潟へ、瞬たちく間に立蔽おほう、黒漆こくしつの

屏風びょうぶ一万枚、電光いなびかりを開いて、風に流す竜巻たつまきが馳掛はせかけた、その余波なごりが、松並木へも、

大粒な雨と諸もろどもに、ばらばらと、鮎ふな、沙魚はぜなどを降はらしました。

竜巻がまだ真暗まつくらな、雲の下へ、浴衣の袖、裾、消々きえぎえに、冥土めいどのように追立てられる

女たちの、これはひとり、白鷺しらさぎの雛ひなかとも見紛みまごうた、世にも美しい娘なんです。」

彫玉の技師は一息した。

「……出稼でかせぎの娼妓しょうぎの一群ひとむれが竜巻の下に松並木を追われて行く。……これだけの事は、今までにも、話した事がありましたから、一度、もう、……貴下あなたの耳に入れたかも知れません。」

君待て、仏国のわけしりが言ったと聞く。

「再びする談話を、快く聞く彼の女には、

汝なんじ、愛されたるなり。」

筆者は、別の意味だが、同じ心で聞入った。……

「朝顔かんざしの簪をさしていました。——

（——病気じゃないんです。僕はもう駄目なんです、死にたいんです。）

事実、そのやさしい、恍惚うっとりした、そして、弱々しい中うちに、目もとの凜りんとした顔を見ると、腹の疼いたいのは忘れましたが。

（まあ。）

娘は熟じつと顔を見ました。

（私も死にたいの。）

竜巻のために、港を出る汽船に故障が出来た。——（前刻さつき友だちと浜へ出て見た、そう

いえば、沖合一里ばかりの処に、黒い波に泡沫を立てて、鮫が腹を赤く出していた、小さな汽船がそれなんです。——日暮方の出帆が出来なくなつた。雑用宿の費に、不機嫌な旦那に、按摩をさせられたり、煽がせられたり。濁つた生簀の、茶色の蚊帳で揉まれて寝たが、もう一度、うまれた家の影が見たさに、忍んでここまで来たのだ、と言います。

弥生の頃は、金石街道のこの判官石の処から、ここばかりから、ほとんど仙境のように、桃色の雲、一刷け、桜のたなびくのが見えると、土地で言います。——町のその山の手が、娘のうまれた場所なのです。

(私は、うちにお父さんと、お爺さんが。)

(僕は祖母さん一人……)

(死んで、あの、幽霊になつて、お手つだいした方が、……ええ、その方がましだと思つてよ。)

(ほんとうです。死んだ方が可い。)

娘は、紅麻の肌襦袢の袖なしで、ほんの手拭で包んだ容子に、雪のような胸をふつくりさして、浴衣の肌を脱いで、袖を緋の扱帯に挟んでいました。急いで来て暑かつたんでしよう。破蚊帳から抜出したので、帯もしめない。その緋鹿の子の扱帯が、白鷺に鮮

血まろの流れるようです。

(こんなにして死ぬと……検死の時、まるで裸にされるんですって——)

(可いや厭やだなあ。)

(手だの足だの、引ひくりかえされるんですって。……この石の上でしようか、草の中でしようか。私、お湯に入るのも極きまりが悪かった。——でも、そうやって検死されるのを、死ねば……あの、空から、お振袖を着て見ているから可いいわ。私お裁縫しごが少し出来ます、貴あ方なたにも、ちゃんと衣服きものを着せますよ、お袴はかまもはかせましょうね。)

私は一刻いっときも早く、速すみやかに死しにたくなつた。

その扱帯こつつかを托たくつて——娘が、一結び輪にしたのを、引絞ひきしめりながら、松の幹をよじ上つた勢いきおいのよさといつたら。……それでも、往還の路へ向かない、瓜畠うりなの方の太い枝へ、真中まんなかへ掛けて、両方へ、幻の袖のような輪を垂らした。つづく下枝の節の処へ、構かまわれない、足が重かさなるまでも一所に踏掛ふみかけて、人形の首を、藁わら苞づとにさして、打交ぶつちがえた形に、両方から覗のぞいて、咽喉のどに嵌はめて、同時に踏ふはずして、ぶらんこに釣つ下くだろうという謀反むほんでしてなあ。

用意が出来て、一旦ずり下りて、それから誘いつて、こはう、斜はすの大おおき幹かですから、私わが先へ、順はに上あへ這はつたのですが、結綿ゆいわたの島田へ、べつたりと男の足を継ついだよううで変かです。

娘の方も、華奢な、柔い肩を押上げて、それだと、爪さきがまだ、石の上を離れないで、勝手が悪い。

そこで、極めた足場、枝の節へ立てるまで、娘を負う事になりました。一度、向合った。

(まだ、名を知らない。)

(私、ゆう。)

(ゆう、勇。)

(あら、可哀相に、おてんばじやありません。イの。)

(……ああ、お優さん。)

(はい。)

(僕は、夏吉。)

(あれ、いいお名——御紋着も、紹が似合うでしょうね。)

お優さんは、肌襦袢を括った細い紐で、腰をしめて、

(汗があつてよ、……堪忍ね。)

襟を、合わせたんですが、その時、夕顔の大輪の白い花を、二つつむけに、ちらちら





(お魚よ、お魚よ。)

(鮒ふなのようだ。)

てのひら

掌てのひらには、余るくらいなのが、しかも鰓えら、鱭ひれ、一面に泥まみれで、あの、菖蒲しょうぶの根が魚になつたという話にそっくりです。

これで首くくりは見合わせて、二人とも生きる事になりました。ちよつと、おめでたい。両方で瞳めを寄せるうちに、松の根を草がくれの、並木下の小流こながれから芻出はねだしたのではない。昼間、竜巻の時、魚が降つた、あの中の一尾びきで、河北瀉から巻落されたに違いない。昼から今に到るまで、雲から落ちながらさえ、魚うおは生命いのちを保つ。そうしてこの水音うおをしたつて、路の向うから千里百里の思おもをして、砂を分けて来たのであろう。それまでにして魚うおさえ活いきる。……ここは魚売が浜から城下へ往来ゆききをしますから、それが落したのかも分りませんが、思う存分の方へ引きつけて、お優やささんも、おなじ意見で。

早速、草を分けて、水へ入れてやりました。が、天から降つた、それほどの逸物いちもつだから、竜の性を帯びたらしい、非常な勢いきおいで水みづを芻はねると、葉うらに留とまつた、秋近い螢の驚おどいて、はらはらと飛ぶ光に、鱗うろこがきらきらと青く光りました。

(食べれば可かつたなあ、彼奴あいつ。——ああ、お腹が空いて動くことも出来ない。僕は——)

(まあ、可哀相に、あんなに苦勞したお魚を……)

その癖、冷い汗が流れるほど、腹が空いて、へとへとだと、お優さんも言うんでしよう。  
……

父は——同じ 鏝かざりしよく 職しよく だったんですが、盛さかんな時分、二三人居た弟子のうち、どこか村の夜祭に行つて、いい月夜に、広々とした畑あゐるを歩行あゐるいて、あちらにも茅屋かややが一つ、こちらにも茅屋が一つ。その屋根に狐が居たとか、遠くで砧きぬたが聞きえたとか。つまり畑へ入つて瓜を盗んで食ううちに、あたり一面の水になつて、膝まで来て、胴こゝろへついて、素すっぱだか裸だかになつて、衣きものを背負しよつて、どうとか……つて、話をするのを、小児こどもの時、うとうと寝ながら聞いて、面白おもしろくつて堪たまらない。あの話を——と云つて、よくその職人にねだつたものです。

ただ悪いたずら戯うたしにさえ嬉うれい処しよを、うしろに瓜畑があります。——路近みちぢかい処しよには一個ひとつも生なつていませんから、二人して、ずつと畑を奥へ忍しのぶと、もこもこ月影を吸つて、そこにも、ここにも、銀とも、金とも、紫とも、皆薄青い覆輪ふりりんして、葉がくれの墨絵もおもしろい。

月夜に瓜畑へ入らないではこの形は分りません。いや、お優さんと一所でなくては。——  
 一個、掌ひとつてのひらにのせました。が夜露で、ひやりとして、玉の沓くつ、珊瑚さんごの枕まくらを据えたようです。

雲の形が葉を拵ひろげて、淡うすく、すいすいと飛ぶ螢は、瓜の筋に銀象嵌ぎんぞうがんをしますのです。この瓜に、朝顔の白い花がぱつと咲いた……結ゆいわた綿わたを重そうに、娘も膝かみもとに袂たもとを折ひつて、その上へ一顆ひとつのせました。いきなり齒を当てると、むし齒になると不可いけないと、私のために簪かんざしの柄を刺して、それから、皮を取つて、裂目を入れて、両ふたつに分けて、とろとろと唇が触つたか、触らない中に——

いまの鼯鼠もぐら、田鼠たねずみの形を、およそ三百倍したほどな、黒い影が二つ三つ五つ六つ、瓜畑の中へ、むくむくと湧わいて、波を立てて、うねつて起きた。

(泥棒。)

(どツ、泥棒。)

と喚わめくや否や、狼のように人立じんりつして、引包ひつつんで飛とびかかった。

(あれえ。)

(阿魔あまつちよは、番小屋へかつげ。)

(この野郎。)

(二才め。)

私は仰向けに撲飛はりとばされた。

(身もんだえしやがると、棒しぼりにして、俺等おらつちの小便をしっかけるぞ。)

(村のお規則きまりだい。)

(堪忍して、堪忍して……)

娘の声は、十二本の足の真黒まっくろな可恐おそろしい獣の背に、白い手を空にして聞こえました。

瓜番小屋は、ああ、ああ血の池に掛けた、棧敷くろがねのように、鉄が煙りながら宙に浮く。…

…知らなかった。——直しき近い処にあつたのです。

(きれいな黒子だな、こんな処に、よう。)

私の目からは血が流れた。瓜は皆真紅まっかになつて、葉ごとに黒い浪打つ中を、体は、ただ地を摺すつて転がった。

心中見た見た、並木の下で、

しかも皓齒しろはと前髪で。……

心中見た、見た、並木の下で、

しかも皓齒……

番小屋の中から、優しく、細い、澄んだ声で、お優さんの、澄まして唄うのが聞こえました。」

小山夏吉は、声が切つて、はらはらと落涙した。

「お聞きになつて、どう、お考えなさるでしょう？」

私には、その時、三つだけ、する事がありました。……

首をくくる事、第一。すぐ傍の茶店へ放火する、家を焼いて、村のものを驚かす事、第二。第三は飛込んで引縛られて小便を、これだけはどうも不可い……どいつも私に二一嵩ぐらい、村角力らしいのも交つて、六人居ます。

間に合う、合わないは別として、私は第二の手段を選ぶのが、後に思うと、娘に対する義務ではなかつたかと思うのです。わずかに復讐の意義をかねて。——ええ、火の用意は、と言うんですか？……煙草のために燐寸がありました。それでなくても、黒くなつた畑の上に、松の枝に、扱帯の緋の輪が、燃えて動いているんです。そればかりでも家は焼けるのに、卑怯な奴で、放火が出来ない。第一の事を、と松に這寄つた時、お優さんの唄が聞こえましたのは——発狂したのでしょうのに——

（——この通りあきらめました。死なないでお帰りなさい——）

そう言つてくれるのだと、身勝手ばかり考えて、

松の根もとに<sup>いちじ</sup>苳が見える、

お前末代<sup>いちじ</sup>わしや一期……

一期末代添おうとしたに、

松も苳も、もう見えぬ————とまた唄う。

ええ、その苳という<sup>あか</sup>紅い実も、火をつけて、火をつけて、とうつくしい、<sup>りこう</sup>伶俐な娘が教えたのかも知れないのに……耳を<sup>ふさぎ</sup>塞ぎ、目を<sup>つむ</sup>瞑つて、転んだか、<sup>つまず</sup>躓いたか、手足は血だらけになつて、夜のしらしらあけに、我が家で、バツタリ倒れたんです。

並木で人の死んだ<sup>うわさ</sup>風説はきかない。……

翌月、不意の<sup>たすけ</sup>補助があつて、東京へ出ました。「

（すぐにある<sup>せん</sup>技芸学校を出たあとを、あらためて名匠の内弟子に入つたのである。）

「やつと一人だちで故郷へ帰る事が出来て、やがて十年前に、<sup>ぜん</sup>前申したわけで六地藏があすこへ立つたと聞きました頃には、もう山桜の霞の家も消えている……お優さんの行方は知れませんが。生命<sup>いのち</sup>はあつたのでしよう。いづれ追手が<sup>かか</sup>掛つたのでしよう。おなじように、

昇かつがれて、連れ戻されて、鱗の落ちた魚、毛のあか膚はだになつた鳥は、下積に船に積まれて、北海の浪に漾ただよつたのでしよう。けれども、汽車は、越前の三国、敦賀つるが。能登の富来、輪島。越中の氷見、魚津。佐渡。また越後の糸魚川いといがわ、能生のう、直江津——そのどこへ売られたのか、捜しようがなかつたのです。

六人が、六条むすじ、皆赤い蛇に悩まされる、熱の譚うわごと言を叫んだという、その、渠等かれらに懲罰を給たまわつた姫神を、川裳明神と聞いて、怪しからんことには——前刻さつきも申した事ですが、私も獺かわおそだと思つて、その化身にされたのを、お優さんのために、大不平だつた。松の枝の緋鹿子ひがのこを、六人して、六条に引裂いて、……畜、畜生めら。腕に巻いたり、首に掛けたり、腹巻はまだしも、股に結んで弄もてあそびなぞしていやがつた。払つて浄きよめて、あすこの祠ほこらに納めたと聞いてさえ、なぜか、扉を開けようとはしませんでした。赤い蛇を恐れたのではないのです。——私は実は、めぐり合つて、しめ殺されたい。殺されて、そうして、彼奴等きやつらよりなお醜い瓜かじりの頬ほかけ地藏を並べれば可いんです。

小山夏吉の旅行癖が——諸君によくお分りになつたと思う。

「——大笹の宿で、しかも、この、大笹村にある……思ひかけず、その姫神の縁起に逢つ

た。私は、直ぐに先祖の系図を見る真剣さと、うまれぬさきの世の履歴を読む好奇心と、いや、それよりも、恋人にめぐり逢う道しるべの地図を見る心の時めきで、読む手が思わず震えました。

川裳明神の縁起——可心、述のぶる……」

## 七

「大笹の宿のその夜、可心の能登紀行で、川裳明神の本地が釈然としました。跪ひざまずかなければなりません。私は寝られません。

なぜか、庭の松の樹を、一度見ないでは、どうしても気が済まなくなりました。手ぐりつけられるように。……金石街道でお優さんと死のうとした、並木の松に、形がそっくりに見えて忍耐がまんがならないのです。——

勝手は心得ていましたから、雨戸を開けました。庭の松が、ただ慄然ぞっとするほど、その人待石の松と枝振は同じらしい。が、どの枝にも首を縊くる扱帯しゅきは燃えてはおりません。寝



そびれた上に、もうこうなつては、葉がくれに、紅いのがぶら下つていようも知れないと、  
 跣足はだしでも出る処を、庭下駄があつたんです。

暗夜やみだか、月夜だか、覚えていません。が、松の樹はすやすやと息を立てて、寝姿かと思ふ静しずかさで、何だか、足音を立てるのも気の毒らしい。三度ばかり、こんもりと高い根を廻りましたが何にも見えません。茫然ぼうぜんと、腕組をして空を視ながめて立つた、二階の棟はずれを覗のぞいて、梟ふくろが大きく翼を拡げた形で、またおなじような松が雲の中に見えるんです。心を曳ひかれて、うっかりして木戸を出ました。土が白い色して、杜かきつばた若たの花、紅羅がんびの蒼つばみも、色を朧おぼろに美しい。茱萸ぐみの樹を出ますと、真夜中の川が流れます。紀行を思うと、渡るのが危あぶなつかしい。生えた草もまた白い。土橋の上に、ふと二個向合ふたつつた白いものが見えました。や、女だ！ これは。……いくら田舎娘だつて、まだ泳ぐには。——思わず、私が立停たちどまると、向合むかいあつたのが両方から寄つて、橋の真中まんなかへ並んで立ちました。その時莞爾にっこり笑つたように見えませんが、すたすたと橋を向うへ行く。跣足はだしです。よく見ると、まるの裸体はだか……いや、そうでない。あだ白い脚は膝の上、ほとんどつけ根へ露呈あらわなのですが、段々瞳まぶたが定きまると、真紅まつかな紅羅がんびの花を簪かんざしにして、柳条しまぎさ笹さのような斑ふの入った薄い服きもの、——で青いんだの、赤いんだの、茱萸ぐみの実が玉のごとく飾つてある。——またしきりに鳴く——

蛙の皮の疣いぼいぼ々のようでもありません。そうして、ひとつとび飛とびずつ大おお跨またに歩ある行くのが、何で  
すか舶来の踊子が、ホテルで戸とまどい惑とまどいをしたか、銀座の夜中に迷子になった様子で。その癖、  
髪の色は黒い、ざらざらと捌さばいたおさげらしい。そのぶら下った毛の中に、両方の、目が  
光る。……ああ、あとびつしやりをする。……そうでないと、目が背中へつくわけがない、  
と吃びっくり驚おどろしました。しかし一体、どっちが背だか腹だか、開はけた胸も腹も、のっぺらぼう  
で、人間としての皮の縫目が分りません。

少し上流の方へ伝つたつて行くと、向う左へ切れた、畝あぜ道みちの出口へ、おなじものが、ふら  
ふらと歩ある行あるいて来て、三みつ個つになった。三個が、手足を突張つっぱらかして、箸の折れたように、  
踊るふりで行くと、ばちやばちやと音がして、水からまた一個ひとり這はい上あった。またその前途ゆくて  
に、道の両側しやがに踞しゃがんで待まちつたらしいのが、ぽんと二個ふたつ立つと、六個も揃むたりって一列になりま  
した。逆に川下へ飛ぶ、ぴかりぴかりと一つ大おおな螢おほの灯あかりに、皆みんな脊せが低い。もつとも、ずつ  
と遠とほくなったのだから、そのわけかも知れませんが、三尺二尺、五寸ぐらいに、川べりの  
田舎道はるか遥とほになると、ざあと雨の音がして、流ながれの片側、真ま暗くらな大おおな竹たけ藪やぶのざわざわと動  
いて真暗な処で、フツと吸すわれて消きえました。

ほんとうに降ふって来た。私は、いつか橋を渡わたっていたのです。――

小雨に、じつとりとなつた、と思つたのは、冷い寝汗で。……私はハツと目が覚めました。」

## 八

「翌朝思のほか寝過ごして、朝湯で少しはつきりして、朝飯を取ります頃は、からりと上天気。もう十時頃で、田舎はのんきですから、しらしら明もおんなじに、清々しく、朗かに雀たちが高轉で遊んでいます。蛙も鳴きます。旅籠の主人に、可心寺の聞きたしをして——(女神は、まったく活きておいでなざる。幽寂とした時、ふと御堂の中で、チリンと、幽な音のするのは、簪が揺れるので、その時は髪を撫でつけなざるのだそうである。)と聞く時分から、テケテケテン、テトドンドンと、村のどこかで……遠い小学校の小児の諸声に交つて、静に冴えて、松葉が飛歩行くような太神樂の声が聞えて、それが、裾に響きました。」

おお！ここに居る。——流に添つて、上の方へ三町ばかり、商家も四五軒、どれも片側の藁葺を見て通ると、一軒荒物屋らしいの、横縁の端へ、煙草盆を持出して、

六十ばかりの親仁おやじが一人。角つぶちの目金めがねで、熟じつと——別に見るものはなし、人ひと通とちりもほとんどないのですから、すぐ分つた、鉢前おほきの大きく茂つた南天燭なんてんの花を——（実はさぞ目め覚さまかろう）——悠然として見ていた。ほかに、目に着いたものはなかつたのですが……宿で教えられた寺の入口の竹藪たけやぶが、ついそこに。……川は斜ななめに曲つて、巖いわが嶮けわくなり、道も狭く、前途ゆくては、もう田畝たんぼになります。——その藪の前の日向ひなたに、ぼつたら焼やきの荷ひさしに廂ひさしを掛けたほどの屋台を置いて、おお！ここに居る。太神樂が、黒木綿の五いつつもん紋もんの着流きりゅうしで鳥打帽かぶを被つた男と、久留米くろめがすり緋はにセルの袴はかまを裾長はきながに穿は流ながした男と、頬杖ほかまを突合つて休んだのを見ました。端初はな、夢に見た藪はなにそっくりだ、と妙な気がした処へ、この太神樂で陽気になつた。そのまますれ違つて通つたのです。

向つて、たらたらと上ある坂を、可なり引込ひっこんで、どつしりした茅かやの山門かやが見えます。一方はその藪は畳じやうみで、一方は、ぐつと崖がけに窪くぼんで、じとじとした一面の茗荷みようが畑たけ。水みず溜りには杜かきつばた若ばたが咲いていました。上り口をちよつと入つた処に、茶の詰襟ばちてのひらたの服で、護ゴ謨ムのぼろ靴はを穿はいて、ぐたぐたのパナマを被つた男が、撥ばちで掌てのひらを敲たたきながら、用ありそうに立たっている。処へ、私が上りかかると出会あひがしらに、横よこ溝どぶを跨またいで、藪はからぬつくりと、頭あられたのは、でつぷりと肥ふとつた坊主頭ふしづで、鼠木綿ねずもを尻高々と端折はしよつて、跣はだし足あしで鋏くわを

ついた。……（これがうつくしい伯母さんのために出家した甥<sup>おい</sup>だと、墨染の袖に、その杜若の花ともあるべき処を）茗荷<sup>みょうが</sup>を掴<sup>つか</sup>み添えた、真竹の子の長い奴<sup>やつ</sup>を、五六本ぶら下げていました、

（じゃあ、米一升でどうじゃい。）

すぐこう云うと、詰襟が、

（さあ、それですがね。）

（銭、五貫より、その方が割じゃぜい——はっはっはっ。稗<sup>ひえ</sup>まじりじやろうが、白米一升、どないにしても七十銭じゃ。割じやろがい。はっはっはっ。）

泥足を捏<sup>こ</sup>ねながら、肩を揺<sup>ゆ</sup>つて、大きに御機嫌。

給<sup>しん</sup>金の談判<sup>しんしょう</sup>でした。ずんずん通り抜けて、寺内へ入ると、正面がずツと高縁<sup>たかえん</sup>で、

障子が閉って、茅草<sup>かやぶき</sup>ですが本堂らしい。左が一段高く、その樹林の中を潜<sup>くぐ</sup>ると、並んではいますが棟が別で、落葉のままに藁<sup>かわら</sup>が見えます。階<sup>きざ</sup>を上ると、成程、絵馬が沢山に、正面の明神の額の下に、格子にも、棧にも、女の髪の毛が房々と掛<sup>か</sup>つています。紙で巻いたり、水引で結んだり、で引いて見ましたが、扉は錠<sup>てん</sup>が下りています。虹の帳<sup>にじとぼり</sup>、雲の天<sup>てん</sup>蓋<sup>い</sup>の暗い奥に、高く壇をついて、仏壇、廚子<sup>ずし</sup>らしいのが幕を絞つて見えますが、すぐに

像が拝まれると思つたのは早計でした。第一女神でおいでなさる。まず拝して、絵馬を視て、しばらく居ました。とにかく、廚裡へ案内して、拝見……を願おうと……それにしても、竹の子上人は納所なのかしら、法体した寺男かしら。……

女神の簪の音を、わざとでなく聞こうとして、しばらくうっかりしたものと見えます。なぜというに、いま、樹立の中を出ますと、高縁の突端に薄汚れたが白綸子の大蒲団を敷込んで、柱を背中に、酒やけの胸はだけで、大胡坐を搔いたのは敷の中の大入道。……納所どころか、当山の大和尚。火鉢を引寄せ、脛の前へ、一升徳利を据えて、驚きましたなあ——茶碗酒です。

門内の広庭には、太神楽が、ほかにもう二人。五人と揃って、屋台を取巻いて、立った、踞んだり、中には赤手拭をちよつと頭にのせたのも居て、——これは酒じゃない、大土瓶から、茶をがぶがぶ、井の古沢庵を横嚙りで遣つてると、破れかかった廚裡の戸口に、霜げた年とつた寺男が手を組んで考えた面で居る処。

けたけたけたと、和尚が化笑を唐突に遣つたから、私は肩をすぼめて、山門を出た。

何と、こんな中へ開扉が頼まれますものですか。

なお驚いたのは、前刻の爺さんが同じ処で、まだ熟と南天燭の枝ぶりを見ていた事です。——一度宿へ帰って出直そうとそこまで引返したのですが、考えました。そちこち午すぎだ、帰れば都合で膳も出そうし、かたがた面倒だ。一曲か二曲か、太神楽の納るまで、とまた寺の方へ。——

テンドンドン、テケレンと、囃子のはじまる。少し坂を上って、こう、透しますと、向う斜にずつと覗込む、生垣と、門の工合で、赤い頭ばかりが鞠のように、ぴよんぴよんと、垣の上へ飛ぶのと——柱を前へ乗出した和尚の肩の処が半分見える。いま和尚の肩と、柱の裏の壁らしく暗い間に、世を忍ぶ風情で、※娜と、それも肩から上ぐらい、あとは和尚の身体にかくれた、婦が見えます。

はつと思つた。

髪は艶々と黒く、色は白いと思うのが、凄いほど美しい。

が、近づけません、いや、寄って行けない。せめて一人、小児でも、そこらに居てくれれば可いのですが、小学校の声ばかりまた遙に響くんです。私ただ一人……それに食べものが出ている……四十面を下げたものが、そこへ顔が出せますか。

殊に、佳い女、と思うほど、ここにうそうそ居て、この顔が見えよう。覗くのさえ気が

さしますから、思切つて、村はずれの田畝<sup>たんぼ</sup>まで、一息に離れました。

蛙<sup>か</sup>がよく鳴いています。その水田の方へ、<sup>なわて</sup>暇へ切れて、蛙<sup>か</sup>が、中でも、ことごところころ、よく鳴<sup>なき</sup>頻<sup>しき</sup>つてる田のへりへ腰を落し、ゆつくり煙草を吹かして、まずあの南天老人を極<sup>き</sup>めました。

——しばらくして、ここを、二人ばかり人が通る。……屋台を崩して、衣装葛籠<sup>つづら</sup>らしいのと一所に、荷車に積んで、三人で、それは暇<sup>なわて</sup>の本道を行います。太神楽も、なかなか大<sup>お</sup>仕掛<sup>おしかけ</sup>なものですな。私の居た暇<sup>なわて</sup>へ入つて来たその二人は、紋着<sup>もんつき</sup>のと、セルの袴<sup>はかま</sup>で。……田畝の向うに、<sup>ひとむらわらや</sup>村藁屋が並んでいる、そこへ捷<sup>ちかみち</sup>徑<sup>みち</sup>をする、……先<sup>さきのり</sup>乗<sup>り</sup>とか云うんでしよう。

私は、笑いながら、

(お寺の、美人はいかがでした。)

<sup>あいて</sup>対手が道化ものだから、このくらいな事は可い、と思つた。

(別<sup>べつ</sup>嬪<sup>びん</sup>? お寺に。)

とセルが言うと、



(弁天様があるのかね。)

と紋着が生真面目です。

私はまごついた。

(いいや、和尚の、かみさんだか、……何ですかね。)

(ははは、御串戯もんだ。)

(別嬪が居て御覧じろ、米一升のかわりに引攪つちまう。)

と笑いながら、さつさと行きます。

はぐらかすとは思えません。——はてな、それでは、いま見たのは。——何にしても太

神樂は、もう済んだのですから、すぐに可心寺へ出向く筈の処を、少々居迷ったのは、前

刻から田の上を、ひよいひよいと行る蛙連中が、大小——どうもおかしい。……生りはじ

めの瓜に似ている。……こんな事はありません。泳ぐ形は、そんなでもないが、ひよんと

構えたり、腹を見せて仰向けに反った奴などは、そのままです。瓜の嬰児が踊っている。

……それに、私は踏込んで見る気はありませんでしたが、この二三枚を除いたほかは、つ

づく畠で、気のせいか、一面に瓜が造つてあるようです。蛙どもは、ひよんひよんと飛ぶ。

すいすい泳ぐ。ばちやりと匆ねる。どうもおかしい。そのうちに、隣のじとじとした廃

畑ばたから、畝あぜうつりに出て来る蛙を見ると、頭に三筋ばかり長い髪の毛を引掛ひっかけて曳ひいているのです。おや、また来るのも曳ひいている。五六疋びき——八九疋。——こっちの田からも飛込んでまた引いて出る。すらすらと長い髪の毛です。熟じつと視みると、水底みなそこに澄ひました蛙は、黒いほどに、一束ねにして被かいでいます。処々に、まだこんなに、蛸おたまじやくし 蚪たうがと思うのは、皆みんな、ほぐれた女の髪かみで。……

女神の堂に、あんなに、ばらみの、たぼみのが有つたのを見ない前だと、これだけでも薄気味が悪かつたでしようのに。——そんな気はちつともなかつた——ただ、畝あぜどりの廃すたればた畑ばたをよく見ると、畳五枚ばかりの真ま中に、焼やき棄すての灰が、いっぱい湿しつて、淀よどんで、竹の燃えさしが半ば朽ちて、ばらばらに倒れたり、埋うもれたりしています。……流ながれか灌かん頂ちよう——虫送り、虫追、風邪の神のおくりあと、どれも気味のいいものではない。いや、野墓のざんまい、——野三昧のさんまい、火葬のあと……悚然ぞつとすると同時に、昨夕ゆうべの白い踊子を思い出した。さながらこの蛙に似ている。あつけに取られた時でした。

(やあ——やあ——やあ——)

と山裾うしろの方から、野良声を掛けて、背後うしろの畝あぜを伝つつて来た、鍬くわをさげた爺さんが、(やあ、お前めえさま様いけましねえ。いけましねえ。)

慌あいさつてて挨拶あいさつした。

(どうも済すままない。)

(やあ、はい、詫わびさつしやる事は何にもねえだがね、そこに久しく立っていると瘡きずを煩わづらうだあかな、取憑とつかれるでな。)

(ええ、どうしてだい。)

(何、お前様。)

と、榛はんの樹から出て来ながら、ひよい、とあとへ飛退とびすきった。

(菜売なうりがそこで焼死やうじんだてばよ。)

(焼死やうじんだ。)

こつちも退すきった。

(菜売？……ツて)

(おおよ。一昨年おとししずらい。菜売の年増女からださ、身体あ役に立たなくなつたちで、そこな瓜番小屋へ夜番に出したわ。——我が身で火をつけて、小屋ぐるみ押焦おっこげたあだ。真夜中での、——そんな時は、はい、お月様も赤かつたよ。)

……………

## 九

「……女神じよしんの殿堂の扉の下にやがて跪ひざまずいた私は、それから廚裡くりの方へ行こうとしました。

あの——山門を入った正面の高縁の障子が開いたままになっていましたから、廚裡へもまわらないで、すぐに廊下を一つ、女神堂へ参ったのですが、扉はしまっていました。――

この開扉を頼むのと、もう一つ、急に住職の意を得たい事が出来たのです。

唐花からはなの絵天井から、壁、柱へ、綾あやと錦にしきと、薄暗く輝く裡なかに、他国ではちよつと知りま

すまい。以前、あのあたりの寺子屋で、武家も、町家も、妙齡としごろの娘たちが、綺麗きれいな縮ちりめ

緬緬の細工ものを、神前仏前へ奉獻する習慣ならわしがあつて、裁縫の練習なり、それに手習てならひ

のよく出来る祈願だつたと言います。四季の花はもとよりで、人形の着もの、守袋まもりふく、巾きんち

着やくもありましょう、そんなものを一条ひとすじの房ふさにつないで、柱、天井から掛けるので。祝

つて、千成せんなり百成ひやくなりと言いました。絢爛けんらんな薬玉くすだまを幾条すじも聯つらねたようです。城主たち

の夫人、姫、奥女中などには金銀珠玉ちりばを鏤ちりばめたのも少くありません。

女神の前にも、幾条か聯つて掛つていた。山の奥の幽なる中に、五色の蔦を見る思があらります。ここに、生りもの、栗、蜜柑、柿、石榴などと、蕪、人参、花を添えた蔓の藤豆、小さな西瓜、紫の茄子。色がいいから紅苺などと、二房一組——色糸の手鞠さえ随分糸の乱れたのに、就中、蒼然と古色を帯びて、しかも精巧目を驚かすのがあつて、——中に、可愛い娘の掌ほどの甜瓜が、一顆。

嬉しくなつて、私が視入つた事は申すまでもありますまい。

黄に薄藍の影がさす、藍田の珠玉とか、柔く刻んで、ほんのりと暖いように見えま  
す、障子越に日が薄く射すんです。

立つて手を伸ばすと、届く。密と手で触ると……動く。……動く瓜の中に、ふと、何かあるんです。」

「——中に——」

筆者は思わず問返した。

「中に何だかあるんです。チリン、チリンと真綿に包まった、微妙な鈴のような音がしました。ああ、女神の簪の深秘に響くというのは、これだと想つて、私は全身、かツとほてりました。」

ここに聞くものは悚然とした。

「中は空ろで、きれ仕立ですから、瓜の合せ目は直ぐ分りました。が、これは封のあるも同然。神の料のものなんです。参詣人が勝手には窺けません。」

——真先にこれの一つと思つたんです。もう堂の中に居るのですから、不躰に廚裡へ向つて、大な声は出せません。本堂には祖師の壇があります。ここで呼立てるのも失礼だと思ひますから、入つた高縁の処、畳数を向うへ長く縦に見取つて、奥の方へ、御免下さい、願ひます、願ひます、とやつたが一向に通じない。弱つた、和尚、あの勢で、寢込みはしないか。廚裡へ行く板戸は閉つていて、ふと、壁についた真向うの障子の外へ、何だか、ちらりと人影が射したようで、それなり消えましたから……あの美しい女が……あるいは人に隠れたのかも知れない。しかし帰れません。思切つて、ずかずかと立入つて、障子を開けますと、百日紅が、ちらちらと咲いている。ここを右へ、折れ曲りになつて、七八間、廂はあるが、囲のない、吹抜けの橋廊下が見えます。暗い奥に、庵が一つ。背後は森で、すぐに、そこに、墓が、卒塔婆が、と見る目と一所に、庵の小窓に、少し乱れた円鬚の顔が覗いて、白々と、ああ、藤の花が散り澄ますと思う、窓下の葉蘭に沈んで、水の装束つた水盤に映つたのは、撫肩の靡いた浴衣の薄い模様です。襟うらに紅い

のがちらりと覗いて、よりかかった状さまに頬杖かたほして半ば睡ねむるようになっていました。ああ、寝ね着まきで居る……あの裾すその下に、酒さけくさい大坊主おんぼが踏反ふんぞつて。……

私は慇懃いんぎんに礼をしました。

瞳ひとみを上げる、鼻筋はなぢが冷く通つて、片頬かたほにはらはらとかかる、軽かろいおくれ毛けを撫なでながら、静しずかに扉かどを出でました。水盤みづいの前に、寂さびしく立つ。黒縹くろじゆす子こと打合うちあせらしい帯おビを緩ゆるくして、……しかし寝ねていたのではありません。迎むかえるように、こつちから橋はしに進すすんで——象ぞう嵌がんなどを職しやくにします——話わして、瓜うりの事を頼たのみました。

やさしい声で、

(和尚様は留守でございます。けれど、明神様へ……私から。)

(是非どうぞ。)

前刻さつきは、あの柱はしらの蔭かげに、と思おもつて、

(太神樂たいかみはいかがでした。)

(まあ、違いますよ、私は見みはいたしません。)

(ええ、それでは。)

(明神様の御像おすがたを、和尚さんが抱かかいて出でたのでございます。お慰なぐさみに、と云いつて、私は

出はいたしません。明神様も、御迷惑だったでしょう。）

（貴女は。）

（私は可厭ですわ——それに御厄介になつております居候なんですから。）

瓜の中が解つたら、あるいはこの意味も、どうした事か、解るかも知れない。

（これでございますね。）

御廚子の前に、深く蠟燭を点じ、捧げて後、女は紅の総に手を掛けた。燈をうけると、その姿は濃くなつた。

（よく出来ていますこと。）

（ああ、そうして取れますか。）

自分の顔の蒼くなるまで、女のさしのぼした雪白の腕に、やや差寄つて言いました。

（畠のだと、貴方の方が取るのがお上手でしょうけれど……）  
微笑する。

（ええ。）

（これは、この蔓の結びめで解けます。私なぞも、真似をして拵えましたから存じております。——まあ、貴女が。）



と云つて、廚子を拝んで、

(お氣にめして、時々お持ち遊ばすそうで、ちつとも埃ほこりがついていません。——あすこへ……明るい処へ参りましょう。お仕事の事で御覧になりますなら、その方がよく見えます。)

消えるようになって、すらすらと出ました、障子際へ。明けると、荒れたが、庭づくりで、石の崩れた、古い大な池が、すぐこの濡縁おおきに近く、蓮はすは浮葉を敷き、杜かきつばた若は葉がくれに咲いている。……御堂の外格子——あの、前刻階さつきざはしから差覗さしのぞいた処はただ、黒髪の暗い簾すだれだつたんですがな。

(どうぞ、貴女あみだが明けて——お見せ下さい。)

さし向つた、その膝に近づきました。

(お菓子でしょうか、よく合つておりますこと。)

私へ、斜めに、瓜を重いように、しなやかに取つて、据えて、二つに分けると、魚がひ尾とつ、きらりと光り、チンチンチンと鱗うろこが鳴ると齊ひとしく、ひらりと池の水へ落ちました。

あ、あ、あ、あの池の向うの、大な松おおきの幹を、結綿ゆいわたの娘と、折重おりかさなつて、緋かすりの単衣ひとえの少年が這つている。こつちで、ひとと女に寄ろうとする、私の膝が石のようにしびれた

と思うと、対向で松の幹を、少年がずるずると這つて落ちた。

落ちると同時に、その向うの縁に、旅の男が、円鬚の麗人と向合っているのが見える。そこには、瓜が二つに割れて、ここの松の空なる枝には、緋鹿子の輪が掛りました。…御堂も、池も、ぐるぐると廻つたんです。

見る見る野の末に黒雲がかかると、黒髪影の池の中で、一つ、かたかたと鳴くに連れて、あたりの蛙の一斉に、声を合わせるのが、

松の根本に茸が見える……………

あの当時の唄にそのままです。

飛びついて抱こうとする手が硬ばつて動かない。化鳥のごとく飛びかかった、緋の扱帯を空に掴んで、自分の咽喉を締めようとするのを、じつと押えて留めました。女の袖が肩を抱くと、さし寄せた頬にかかつておくれ毛が、ゆれて、靡いて、そこいらの、みの毛ばら毛、髻も一所に、あたりは真暗になりました。

(連れてつて下さい、お優さん、冥途へでもどこへでも。)

(お帰りなさい——私が一所に参りますから。)

その時、甘い露に……唇が濡れました。息を返したんです。大笹の宿の亭主が、余り帰

りの遅いのを見に来て、花桶の水を灌いだんだそうです。

(……私が一所に参りますから。)

で、——お優さんは、この炬燵の、ここに居ます。」

筆者は炬燵から飛しきった。

「しかし、この頃に、大笹へ参つて、骨を拾つて帰ろうと思います。

あの時、農家の爺さんが(菜売)の年増女だと、言つたでしょう。瓜番の小屋へ自分で火をつけたのは尋常ごととは思わなかつたが。……ただ菜売とだけ存じました。——この頃土地の人に聞くと、それは、夏場だけ、よそから来て、肉を売る女の事だと言います。それだと、お優さんの、骨は、可心寺の無縁ですから。」

### 附記。

その後、大笹から音信があつた——(知人はその行を危んだが、小山夏吉は日を措かず能登へ立つた)——錦の影であろう、廚子にはじめて神像を見た時は、薄い桃色に映つた、実は胡粉だそうである、等身の女神像は肩に白い蓑を掛けて、それが羽衣に拝まれる。蓑を据えた大魚は、やや面が奇怪で、鯉だか、鱒だか、鱈だか、亀だか、蛇だか、人間の顔だか分ら

ない。魚尾は波がしらに芻ねている。黒髪かんざしの簪かんざしに、小さな黄金きんの鮒ふなが飾かざつてある。時に鏘しやうようしよう々として響くのはこの音で、女神くしけずが梳くしけずると、また更あらためて、人に聞きいた——それに、この像には、起居たちいがある。たとえば扉の帳をとぎす、その時、誦經ずきやうしや者の手に従したがうて、像の丈の隠るるに連れて、魚の背に膝ひざが着くというのである。が、小山夏吉の目にも、同じ場合ばいにその氣勢けいせいを感じた。波を枕まくらに、肱ひじまくら枕まくらをさるるであろう。蓑かさの白い袖そでが時として、垂たれて錦帳きんちやうをこぼれなどする。

不思議ふしぎな発条仕掛はねじかけがあるのではないか、と言う。

実まじや、文化まじよりして、慶応おほのみなとの頃まで生存まじした、加賀大野港おほのみなとに一代の怪人、工匠まじにして

科学者まじであった。——町人まじだから姓まじはない、大野浜おほのまの弁吉まじの作まじだそうである。

三味線さみせんただ一挺ちやうを携まじえていずこよりもなく浜まづつたいに流まれて来て、大野の浜まに留とどまつた。しきりに城下まを往来ましたが、医まをよくし、巫術ふじゆつ、火術まを知まり、その頃まにして、人に写真まを示ました。製函たくみに巧まに、機械くわいに精ましい。醤油まのエッセンスにて火ともを灯まし、草まと砂糖まを調まじて鉢山用まのドンドロを合ませたなどは、ほんの人寄ませの前芸まに過まぎない。その技工まの妙まを伝聞まして、当時の藩主まの命まじて刻まましめた、美ましき小人まの木彫まは、坐容立礼ま、進退まを自由まにした。余まりにその活いきたるがごとく、目まに微笑まをさえ含まんで、澄ままし返まつた小憎こにくらし

さに、藩主が扇子をもつてポンと一つ頭を打つや、颯と立って、据腰に、やにわに小刀に手を掛けて、百万石をのけ反らした。ちよつと弁吉の悪戯だというのである。三聖酔をなむる図を浮彫にした如意がある。見ると、髻も、眉も浮出ているが手を触ると、何にもない、木理滑かなること白膏のごとし。——その理、測るべからず。密に西洋に往来することを知つて、渠を憚るものは切支丹だとささやいた。

——鳶（鶴ではない）を造つて乗つて、二階から飛んでその行く処を知らない。

好んで、風人と交つたから、——可心は、この怪工に知を得て、女神の像は成つたのである。

また希有なのは、このあたり（大笹）では、蛙が、女神にささげ物の、みの、髻を授けると、小さな河童の形になる。しかしてあるものは妖艶な少女に化ける。裸体に蓑をかけたのが、玉を編んで纏つたようので、人の目には羅に似て透いて肉が甘い。脚は脛のあたりまでほとんどあらわである。月朧に、燈くらき夜など、高浜、あべ屋、福浦のあたりまで、少からず男を悩すというのである。

小山夏吉の手紙は、この意味を——

「おもいの外、瓜吉（渾名をいう）は暢気だぜ。」

皆云っていたが、小山夏吉は帰らない。

なお手紙によると、再び可心寺に詣でた時は、和尚は、あれから直に亡くなって、檀を開くのに、村の人たちが立会った。——無住だった——というから。

お優さんの骨——ばかりでなく、霊に添って、奥の庵を畠に、瓜を造っているのだろう。本懐であろう。

蛙の唄をききながら、その化けた不良性らしい彼の女等を眷属にして。……

あとでも、時々、瓜は市場に出た。が、今は他のものを装る器具でない。瓜はそのまま天来の瓜である。従って名実ともに塹は冴えた、とその道のもの云った。が惜しいかな——去年の冬、厳寒に身を疼んで、血を略いて、雪に紅の瓜を刻んだ。

昭和二（一九二七）年五月

# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、以下の個所を除いて大振りにつくっています。

「三《みつ》ヶ口」「一ヶ処」

2011年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 河伯令嬢

## 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>